

第11号

2013 年 9 月

特集

混合研究法(mixed methods research)の可能性

混合研究法の基本的理解と現状評価……中村高康

混合研究法の国際的動向……大谷順子

都市・地域社会調査におけるマルチメソッド・アプローチの
展開……後藤範章

「量」と「質」から探る高校生の進路選択……片山悠樹

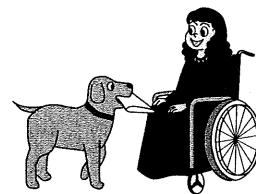
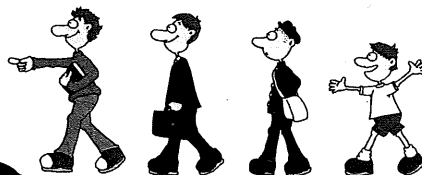
EBMの視点からミックスドメソッドを考える……高木廣文

小特集 フィールドワークにおける倫理問題

フィールドワークにおける葛藤……宮内 洋

調査倫理の一步目……石川良子

支援現場における調査と調査倫理……佐藤 恵



編集・発行＝一般社団法人 **社会調査協会**

発売＝有斐閣



EBM の視点からミックスドメソッドを考える

高木廣文 (東邦大学看護学部教授)

1 はじめに

初めての研究である卒業論文から一貫して、私の研究は疾病のリスク因子を探ることを目的とする疫学研究という量的研究であった。これまでの研究は、厚生（労働）省の特定疾患（難病）、がん、糖尿病、循環器系疾患などの疫学研究であった。これらは、特定の集団を研究対象とした調査研究が主であり、そのため統計的な分析手法を重視し、統計解析のためのプログラム作成は必須であった。そのため現在でも、HALBAU（ハルボウ）という統計学ソフトの開発も手がけている（高木、2007a）。最初の就職先であるアメリカ環境保健研究所から帰国し、看護系大学に就職したときに、初めて質的研究というまったく異なるパラダイムからなる研究方法が存在することを知ることになった。正直な感想として、私もお多分に漏れず、なんて非科学的な研究なのかと驚き、こんな方法をやっていて大丈夫なんだろうかと思った。その後、文部（科学）省統計学数理研究所で仕事をしていたので、当然、質的研究については考えることもなかった。この間に、エビデンスに基づく医療（Evidence Based Medicine：EBM）が重視される傾向がかなり強くなってきた。EBMの基盤となる考え方は、統計学に基づく研究

デザインと解析方法であった（高木・林、2006）。

私にとっての大きな転機は、1999年からタイで HIV/AIDS の問題に数年間に渡って関わったことだと思う。その JICA（国際協力機構）の HIV/AIDS のプロジェクトの終了後に、プロジェクトに関係した地域の病院や HIV/AIDS とともに生きる人々を調査対象に、学生を連れてインタビュー調査や病院見学に行くようになった。このときに、インタビューに基づく研究などをしたことで、このようなインタビューデータに基づく質的研究のもつ科学性を考えるようになった。

そのような状況下で実施されるインタビューやテキスト解釈による質的研究、つまりは自分たちが行っているような質的研究は、科学的なエビデンスを与えることができるのかということに、強い関心をもつに至った。さらに、人間を対象とするような学門領域で、パラダイムが異なるといわれている量的研究と質的研究の各方法論を、統一的に理解することは可能なのか、という問題にも強い関心をもつようになった。

運良く、2回連続して5年間に渡って科研費をもらうことができたので、2001年と03年に全国の看護系大学教員を調査対象として全数調査を実施した（高木・西山、2002、2004；西山・高木、2002、2004）。このときの調

査結果からわかったことは、①エビデンスを得るためのアプローチの重要性は回答者の約9割が認めていること、そして、②看護研究には量的研究が向いているとするのは44.1%であったが、質的研究のほうが向いているとするものは66.7%であったことである（高木, 2005a）。この調査結果は、看護職者はもともと患者の心理面に強い関心をもっていることを示しているものと考えられた。しかし、EBMの方法は、基本的には量的研究の方法論であり、質的研究が看護領域での研究に適しているとしても、質的研究がエビデンスをもたらすのかという問題は、なおさらきわめて重要な意味をもつように私には思われた。

面白いことに、すでに2003年の調査時に「トライアンギュレーション」という用語を47%が知っていると回答し、さらに13%が実施したことがあると回答していたことである（高木, 2005a）。トライアンギュレーションとは、異なる方法や対象などを同一の研究で用いることで研究の信頼性や妥当性を高めるための方法論といえるものであり、ミックスドメソッドもその中に含まれる。この回答の数値が実際の値より高いように思われたが、2002年にフリックの著書の翻訳が出版されており（Flick, 1995, 訳2002）、かなり評価が高かった影響もあるのではないかと考えられる。当時、日本において今でいうところのミックスドメソッドによる優れた研究が本当にあったのかは、文献検討をきちんとはしていないので定かではない。

上述のようにJICAによるタイでのHIV/AIDSに関するプロジェクトに関わっていた関係で、北タイでHIV/AIDSの人々を対象として面接調査などをやり出したこともあり、質的研究の方法論に非常に興味をもつようになった。このため質的研究を科学的方法論と

して、量的研究と同様な立場からを統一的に理解できないだろうかと、看護系大学教員対象の全国調査をやりながら何かヒントになるような方法論はないかとあれこれ文献検討をしていたのだが、なかなかよいアイデアは浮かばなかった。そのときに目にしたのが、西條剛央による『構造構成主義とは何か』という書物（西條, 2005）であった。新進気鋭の若手の書いたこの本は、かなりのインパクトをもっていた。哲学的問題である主観—客観問題が研究方法においても、量的研究と質的研究において生じており、そのような無益な相互対立や批判の状態を解消するために提唱されたメタ理論が構造構成主義である。詳細は西條（2005）を参照していただきたいが、その基本的な考え方は「関心相関性」に基づく研究方法の選択により、主観—客観問題に根ざす量的研究と質的研究の難問を解決しようとするものであった。

その後、構造構成主義の考え方に基づいて、いろいろと自分なりに考えて、とくに池田清彦の構造主義科学論が指摘するように、「科学とは同一性の追求である」（池田, 1998）ならば、「質的研究は科学である」という結論に至った（高木, 2007b, 2011）。

ミックスドメソッドに関しては、2007年に開催された第27回日本看護科学学会学術集会で「現象を読み解くためのMixed Method——質的研究法と探索的データ解析法の共働」というランチョンセミナーを行った（高木・萱間, 2008）。かなり広い会場を設定していたにもかかわらず、入りきれないほどの参加希望者がいたため、不本意ながらかなりの参加希望者を断らなければならなかった。それでもその参加者のあまりの多さに、看護分野でのミックスドメソッドへの関心の高さを実感した。そのときの討論や、その後

に質的研究の方法論上の問題など、自分なりに考えてきたことなどを踏まえて、ミックスドメソッドに関するいくつかの問題について考えてみたい。

2 ミックスドメソッドの実際は

ここまで用語について気にせずに使用してきたが、「ミックスドメソッド」とは、どんな形式であれ「質的研究法」と「量的研究法」の両方を研究デザインとして採用している研究方法を示す用語としよう。ミックスドメソッドをその研究上で用いる方法論の内容からいくつかに分類をすることもできるのだが、本稿ではとにかく「単一の方法論を用いた研究デザインから得られる結果よりも、より研究上の現象説明や解明に有効な複合的な研究デザイン」を示すことにする。

2007年の日本看護科学学会で、ミックスドメソッドのランチョンセミナーを行ったのだが、それ以前にすでに2005年の日本質的心理学会で、「質的研究と量的研究の統合」というテーマでシンポジウムを行っている（高木，2005b）。当時は、哲学的に同一の基盤に基づいて、量的研究と質的研究の科学性を示したいと思っていたため、このようなテーマとなったものである。

ところで、カナダのアルバータ大学には質的研究の方法論のための研修や学会を行うための International Institute for Qualitative Methodology という施設があり、ほぼ毎年定期的に Advances in Qualitative Methods Conference を開催している（AQM, 2013）。質的研究に関心をもつようになってから、科研費が採択されたときには、可能な限り研究発表をするようにしている。昨年は開催されなかったので同じ研究施設が主催する他の学

会で発表したのだが、今年は6月21～23日にアルバータ大学内で開催された。今年の学会のテーマとして「質的研究方法におけるイノベーション」を掲げており、その中の1つとしてミックスドメソッドを取り上げている。

ミックスドメソッドは、これだけ騒がれている方法ではあるが、系統的な文献検討はしていないので、その全体像は把握していない。しかし、実際に上手くいった看護分野での実際例としては、児童虐待の予防のための母親へのスクリーニングと介入に関する Kayama らの研究がある（Kayama et al., 2004）（この論文の詳細に関しては、高木・萱間〔2008〕に概略が紹介されている）。本論文では、虐待を行う母親13名のフォーカスグループインタビューに基づく質的研究を行っているのだが、一方でその背景となるピアサポートグループ1,536名についての基本属性と虐待尺度の質問紙調査を実施し、子どもと気が合わないと感じる母親は、虐待得点が有意に高いことを示している。この量的研究の結果から、質的研究の対象者が本当に虐待していることを示すことができたものと考えられた。これにより質的研究として行われたフォーカスグループへのインタビューが、本当に虐待をしている母親のものであることを保証することができ、テキスト解釈の結果が信頼できるものであることを示すことができたということである。これはあらかじめ研究デザインを立案する段階で、フォーカスグループインタビューを行うのみならず、そのグループのバックグラウンドを客観的に把握するために、質問紙調査の項目として虐待尺度項目を含めるように考慮して、調査計画を立案した成果であるといえるだろう。

その他のミックスドメソッドの研究例としては、新しく提唱された概念を測定するため

の尺度開発のための研究が多くあるのではないだろうか。これまで看護系の大学院での博士論文のための新しい尺度開発に関係する研究指導を、実際にかなり行ってきたことからの私の印象である。

そのような尺度開発のための研究では、最初に研究課題である概念に関する概念分析を行うのであるが、文献がほとんどないような場合には、概念枠組みを探索するための糸口として、質的研究を行うことは一般的な研究プロセスの一部である。その後、質的研究から得られた当該の概念に関する測定を行うために、その尺度の質問項目を整備し、尺度開発のための本格的な質問紙調査を行うことになる。これもたしかにミックスドメソッドの1つといえないこともない。しかし、尺度開発での研究方法は、まず質的研究を行い、その成果をもとにして研究の枠組みを構築し、その後で量的研究を行うものである。したがって、最終的な研究目的は共通するのであるが、どちらかといえば2つの研究方法を1つずつ連続的に行うものであり、同時に両方の方法を行うというものではないだろう。

量的研究と質的研究から得られた結果が相互補完的になるような研究デザインが、本来のミックスドメソッドではないだろうか。この点からいえば、上記のような尺度開発での異なる方法論を用いた連続した研究をミックスドメソッドと呼んでよいのか疑問が残るが、とにかく質的研究と量的研究の両者の協働により、研究上の現象についての理解がより進むように、研究デザインを考える必要があることは確かだろう。

3 ミックスドメソッドへの疑問点は

ミックスドメソッドに対する関心の高まり

は理解できるのだが、いくつかの疑問もまたある。主な疑問点として、①量的研究と質的研究では基本的な哲学的な基盤が異なるのではないか、②量的研究に質的研究を組み込む必要はあるのか、ということである。

この前者の問題については、量的研究と質的研究の背景となるパラダイムの相違があげられる。これについてはすでに述べているのだが、やはり気になる点である。量的研究は基本的には、唯物論的世界観に基づく論理実証主義的な方法論がその基盤にあり、ある現象を測定などにより数値化したデータにすることで、客観的な現象の把握を行うような方法を用いていると考えられる。一方、質的研究においては、研究上の現象へのアプローチやテキスト解釈の立場によって大きく異なっている。すなわち、その哲学的な背景として、解釈学的現象学を基盤にしたり、社会構成主義であったり、シンボリック相互作用論などをその基盤にもっていたりする。このように、量的研究と質的研究では、その方法の基盤にある基本的な考え方に相違があり、パラダイムの首尾一貫性を考えると、「結果良ければすべて良し」といった、何となくご都合主義的な感じをミックスドメソッドは与えなくもない。

この問題を解決するために提唱されたのが、西條による超メタ理論である構造構成主義なのだが、実際のところ私はまだ心の底では納得できないでいる。大きな理由としては、量的研究者の多くは研究をするためにわざわざ哲学書は読まないと思うので、どのような主観—客観問題を解決するための理論が提唱されようと、自然と心に生じてくる疑念を完全に払拭するような、真の相互理解を得るのは困難だろうと考えられるからである。この点から、②の疑問点も生まれてくる。

一般的にいても、実験的な研究や調査を主とする量的研究を行っている研究者は、普通はトライアングレーションやミックスドメソッドという方法論を聞いたことも読んだこともないのではなかろうか。医学領域での臨床研究などはEBMの影響で、たとえば新薬の開発研究・治験などでは、ケースとコントロールの比較研究において、統計学的な無作為割付を行わないような研究は、価値の低いものとみなされる傾向が強いようである。そのような状況のもとで、量的研究に質的研究を追加したり、組み合わせたりするといったような研究は、きわめて稀なのではないだろうか。というよりも、わざわざ主観的解釈に基づく解析結果を、研究成果に加える必要があるのかと疑問をもつのではないだろうか。

しかしながら、質問紙調査を分析する場合、自由記述の箇所に記載された意見をまとめて、補足的に考察を加えるといったことはあるかもしれない。ただし、せっかく、無作為に対象を選んだとすると、かえってそのような記載をすることで、偏りのある結果を研究成果に導入することにもなりかねない。そのため、せいぜい今後の参考意見程度の価値しかもたせられないのが普通だと思う。

看護領域の研究では、自記式無記名の質問紙調査においても、調査対象が何を考えているかを把握したいと思うためか、自由記述の回答欄を結構入れたがる傾向があるように思われる。しかし、実際に自由記述のデータを分析する場合には、そのまとめた結果の一般性は保証されないので、予備的な調査にしか用いられないという認識がまず必要と思われる。

一方では、質的研究においては、情報提供者の背景の記述などに、量的研究の成果を記載することで、研究対象の一般性を示したり、

特殊例であれば、その特殊性を明確にするなどの利点はあると考えられる。

どちらの研究方法を主としているかにより、このような不均衡な扱いが生じると考えられる。なぜこのような方法論上の不均衡が生じてしまうのだろうか。そもそも、量的研究と質的研究を両方とも用いるといっても、その重みが等しいような研究はありえないのではなかろうか。

すでに指摘しているように、もともと量的研究が外部世界の事象（もの）の研究に適しており、質的研究は心的な内部世界の事象（こと）の研究に適していると考えられる（高木、2011）。したがって、研究の目的に応じて、研究方法は使い分けるべきであるし、そのようにしている研究者が大部分だと思われる。そう考えると、ミックスドメソッドを用いるべき研究というものは、人間の主観世界と客観世界の両方を扱うような研究ということになる。それはどのようなことを目的とした研究なのだろうか。

4 ミックスドメソッドが必要な研究とは

本来はパラダイムもその対象領域も異なる2つの方法論からなる質的研究と量的研究を混合して行うことが、研究目的に合致する研究とはどのような研究なのだろうか。

たとえば、文化人類学や医療人類学のように、人に関わる現象として心的事象から社会事象などを、様々な角度から多岐に渡って扱う必要がある学門領域では、そのような方法論を使わざるをえないのではないだろうか。必然的に、このような研究では、論文も長文になるだろうから、通常の学術誌には掲載しにくいものとなる。学位論文のようなものや書籍でないとすべてのデータを解析した結果

を記述するのに困るかもしれない。

前述したように、何かの尺度を新たに作る場合などは、文献に基づいた概念分析を行うとともに、予備的な調査として研究目的に沿った面接調査を行い質的研究を行うことも多い。その後、その成果に基づいて尺度開発のための量的研究を行うというプロセスをとるのだが、このような研究もミックスドメソッドの範疇に入るようである。この場合には、研究のメインは明らかに量的研究であり、質的研究は予備的研究の地位に貶められている。もともと、このようなタイプの研究は、多くは心的な事象をあたかも客観物であるかのように扱うための尺度を作るという方法論に基づくものであり、量的研究のほうがその現象説明や解明にとって優れているという前提に立っている。したがって、多くの質的研究者にとっては納得のいかない話かもしれない。

質的研究が主であった場合でも、Kayamaらの研究 (Kayama et al., 2004) のように量的研究を組み合わせることで、研究の一般性が増すことがあるのは事実だろう。質的研究は量的研究者からみると、どちらかというとき怪しい目で見られがちである。理由は単純で、①対象者数が極端に少なく任意抽出であること、そして②テキスト解釈が主観的であること、の2点に集約されるのではないだろうか。本当は、これらの点は、研究上まったく問題のないことなのだが、疑問に思うだろうことは理解できる。こういった点から、研究対象の背景などの客観情報として示せることは、量的に扱って示せば、それなりに理解しやすいし、研究上の現象説明にも有用であることは確かだろう。

この点から考えると、看護分野の研究はミックスドメソッドで行うのに適しているのかもしれない。看護は医療の分野において、治

療的 (キュア) な側面と療養上の世話 (ケア) の両面を扱う必要があるので、患者の身体などに関する客観情報と精神的な主観情報の両方を扱うことが多いものと考えられる。とくに、看護研究は患者のケアに関心を向けていることが多いために、患者の心の問題にきわめて関心が高い。前述したように、私たちの実施した以前の調査では、看護研究には質的研究のほうが向いているとした回答が66.7%あり、量的研究の44.1%を大きく上回っていたのだが、この結果も、看護分野において患者の心的事象に関する研究が多いことの反映だろうと考えられる。

5 おわりに

ここまで、とりとめもなくミックスドメソッドに関係するだろうと、私が考えている量的研究と質的研究に関わる問題点などを述べてきた。うまい具合に研究上の現象の解明のために、ミックスドメソッドが有用であればよいのだが、何にでも使えるという方法論ではないように考えられる。そもそも2つの異なる方法でデータを取り、異なる解析を行うのであるから、うまくその結果を論文にまとめないと、ページ数も多くなるだろう。

質的研究が基本的に、人の心的事象を対象としていることを考えると、メインが質的研究の場合に、ミックスドメソッドはその力を発揮するのではないかと、現時点では私には考えられる。

文献

- Flick, U., 1995, *Qualitative Forschung*, Rowohlt Taschenbuch, Humburg: Verlag GmbH. (小田博志・山本則子・春日常・宮地尚子訳, 2002, 『質的研究入門——〈人間科学〉のための方法論』春秋社。)

池田清彦, 1998, 『構造主義科学論の冒険』講談社学術文庫。

Kayama M., A. Sagami, Y. Watanabe, E. Senoo and M. Ohara, 2004, "Child Abuse Prevention in Japan: An Approach to Screening and Intervention with Mothers," *Public Health Nursing*, 21 (6): 513-18.

西山悦子・高木廣文, 2002, 「日本看護系大学協議会会員校教員を対象とした EBN に関する意識調査 (2) 看護教育に関する調査結果」『第 22 回日本看護科学学会学術集会講演集』399。

西山悦子・高木廣文, 2004, 「看護系大学教員の質的研究の知識と実践に関する意識調査 (2) 質的研究の講義受講経験と質的研究方法の関係」『第 24 回日本看護科学学会学術集会講演集』529。

高木廣文, 2005a, 「看護系大学・大学院における研究手法の教育——量的研究法と質的研究法の統合的理解を目指して」『インターナショナル・ナーシングレビュー』28(2): 47-51。

———, 2005b, 「質的研究法と量的研究法の統一的教育を目指して」『日本質的心理学会第 2 回大会アブストラクト集』61-62。

———, 2007a, 『HALBAU7 によるデータ解析』シミック株式会社。

———, 2007b, 「質的研究は科学としてエビデンスをもたらすか」『看護学雑誌』71(8): 712-15。

———, 2011, 『質的研究を科学する』医学書院。

———・萱間真美, 2008, 「現象を読み解くための Mixed Method——質的研究法と探索的データ解析法の共働」『看護研究』41(2): 139-52。

———・林邦彦, 2006, 『エビデンスのための看護研究の読み方・進め方』中山書店。

———・西山悦子, 2002, 「日本看護系大学協議会会員校教員を対象とした EBN に関する意識調査 (1) 看護研究に関する調査結果」『第 22 回日本看護科学学会学術集会講演集』398。

———・西山悦子, 2004, 「看護系大学教員の質的研究の知識と実践に関する意識調査 (1) 質的研究の信頼性と妥当性に関する意識」『第 24 回日本看護科学学会学術集会講演集』528。

西條剛央, 2005, 『構造構成主義とは何か——次世代人間科学の原理』北大路書房。

参照 URL

AQM, 2013, <http://www.cvent.com/events/12th-annual-advances-in-qualitative-methods-conference/event-summary-5bae444a05ae44e9bb7d63b0f41d-2fa5.aspx>

